

殺人の報酬

殺人の報酬

佐賀 潜 著

380円

昭和44年 6月20日 印 刷

昭和44年 6月25日 初版発行

発行者 山 本 一 哉

発行所 東京都新宿区西大久保 1 の 433

株式会社 ノーベル書房

電話 東京 362—0169

振替 東京 144895

印刷所 株式会社 光 洋 社

製 本 越 後 堂 製 本

乱丁・落丁本はお取替えます

コード番号 6808

推理小説

人の報酬

佐賀潜著

目次

第 1 章	情事の不安	1
第 2 章	ある計画	27
第 3 章	銭と女	46
第 4 章	決意	65
第 5 章	殺人	84
第 6 章	捜査	103
第 7 章	報酬の確認	122
第 8 章	疑惑の目	141

[illegible]

カバール・イラスト 大塚清六
本文イラスト 石丸考記

第一章 情事の不安



1

師走の、からっ風が吹いている。

十日ばかりすると、新年を迎える街区は、松飾りを終え、人の波を押し流していた。幅員五メートルに満たない、商店街を、左眼に眼帯をした、長身の男が、人の波を縫って、大股で歩いていく。

ここは、国電大井町駅から、大森へ抜ける、三叉商

店街である。人の波は、駅前デパートが、朝から、特売を実施していたので、むらがり集まった婦人客だった。

眼帯をかけた男の首が、婦人客の群れから、つき出ているのは、よほど背丈が高いからであろう。

男は、人の群れで、進路をはばまれると、その都度、後ろを振りかえり、開いている右眼を、鋭く光らせ、あたりを見廻した。

男は、広い三叉路に出ると、足早に、そば屋の角を

左へ曲り、自分の歩いてきた路上をみはった。

誰も、尾行者がいらないのを確認すると、狭い露地を、何度も、曲りながら、大股の歩度をのびし出した。

男は、信用金庫の角を曲るとき、腕時計をのぞいた。二時五分前だった。油気のない、真っ黒い髪が、額に垂れ下り、汗がにじんでいた。

色は浅黒いが、中高の面長の顔立ちと、引締った口元は、美男の類型に属する、男振りだった。

黒い薄手のオーバーの襟を立て、ブルーの水玉模様の、シルクのマフラーをつけている姿は、新聞記者か、テレビタレントのような、感じである。

男は、立会川^{たちあい}へ出る国電のガードの手前で、左へ曲った。

大きな柳の、葉のない細枝が、風に吹かれていた。

その根元に、ペンキ塗の立看板が立てられ、「大井荘」と書いてあった。

柳の裏手に、灰色の、モルタル塗の二階建のアパートが、西陽をうけていた。男は、二階の、一番奥の部屋の窓を睨んだ。

トタン張りの雨戸が一枚開けられ、青いカーテンが、風にゆれているのを確かめると、鉄で出来た外階段を、三段ずつ、とび上るようなのぼった。

このアパートは、土地の人が、「おめかけアパート」と呼んでいるくらい、殆どの入居者が、二号さんか、バーのホステスたちだった。

階下と階上で、十六室あり、どの部屋も、表札が出ていない、午後二時という時間は、彼女たちにとって、真夜中なのか、物音一つせず、ひっそりと静まり返っている。

男は、二階のそれらの部屋を、横眼で見ながら、急に、歩みをおくらせ、爪先で、足音を立てず、進んでいった。

外廊下の、どん詰りに、十六号室と書かれた部屋があった。男は、軽く、ドアを二つノックした。応答がなく、ただ、鍵を外す音がして、ドアが開いた。

美しい女の白い顔が笑った。ドアが閉められ、鍵がかけられた。

「三十分、待ったわ」

女は、不平をいったが、表情は、うれしさに溢れ、男の外套を受取った。男は、眼帯を外すと、ポケットに入れ、

「銀座の事務所を出るとき、変な奴が、下の入口でうろついていたんで、わざと、廻りみちをしたんでね」

と、いいながら、女の手を、軽く握った。

男の背広の襟穴に、菊華の金色のバッジが、光っていた。弁護士バッジである。

「まあ。その変な奴、誰でしょ」

「あんたとの、あいびきを、感づかれたかな」

女は、息を殺したまま、男の顔を、まじまじとみつめた。色白の、大柄な顔に血の気が引いていった。

男は、握っていた手を、ぐいと引寄せると、何もいわず、荒々しく、唇を重ねた。女は、舌を硬わばらせているようだった。男は、舌の先で、女の舌を、追いかけた。女が、舌をからませてきたとき、男は、女からだを、つきはなすと、奥の座敷へ、逃げるように、はいていった。

「先生、聞かせて。ほんとに、後を尾行されたのかしら」

女は男と向き合い、電気炬燵へ足を入れた。

「相手は、司波仙造のことだ。我々のあいびきを、見逃すはずはないだろうな」

「心配だわ」

「ぼくは、三日前のあいびきの時は、マスクをかけてきた。だから、今日は眼帯で、変相してきたんだが」

「それで、銀座から、どうやって？」

「タクシーで、駅前のデパートまで乗りつけ、中へ入り、一廻りしてから、裏口から、三叉の商店街へとび出したんだ。もちろん、尾行者の有無は、気をつけてきたよ」

「誰か」

「大丈夫だと思うが、油断はできないね」

女は、一瞬、眼を伏せていたが、炬燵を出ると、男の胸元へ、からだをぶつけてきた。

「抱いて。ぎゅっと、抱いていてちょうだい。考えただけで、ふるえてくるのよ」

男は、女を抱きとめ、香料の強い髪に、唇を当てがい、冷い笑いを浮べた。

2

男は、弁護士鳴海五郎といい、女は、西銀座のバー「京子」のマダム、玉井京子である。

鳴海は、十年前、東大の法学部を卒業した。

在学中に、司法試験に合格し、卒業すると、司法修習生となった。

二年間の、司法修習が終る頃になると、誰でも、判事、検事、弁護士のいずれかの志望を、きめなければならない。

鳴海は迷うことなく、弁護士となった。

鳴海の父、鳴海四郎は、横河秀樹の乗っ取り事件で有名なデパート黒木屋の重役をしていた。

黒木屋が、乗っ取り派の勝利に終り、その経営権が、関急電鉄株式会社に移ると、鳴海四郎は、社長と

共に会社を追われた。

鳴海五郎が、司法修習生だった頃、不遇の中で、父四郎は病没した。

「わしは、黒木屋に生涯をかけ、四十年間働いてきた。その報いが、このザマだ。金だよ。黒木屋は、関急をバックにした、金に負けたんだ」

この言葉は、父四郎が、死に臨んで、五郎に残した遺言だった。この時から、五郎は、弁護士になるうと、決意した。

父法の裏をくぐる。金を掴む道は、それしかない✓

鳴海五郎の、弁護士への道は、金につながる道だった。父が死んだ後、小さな住宅が一つ残った。百坪足らずの敷地の家が、九百万円で売れた。相続税や、借金を払った残りが、三百五十万円あった。

父一人子一人の鳴海は、一匹狼となって、金と悪の渦巻く、東京で、無名の弁護士として、スタートしたのである。

彼は、弁護士登録を済ませると、三百万円で、銀座五丁目の三光ビルの五階に、事務所を持った。九坪五

合の家賃が、三万円。女子事務員の給料が、一万六千円。電話代が毎月一万円弱。青山に借りたアパートの家賃が、一万二千元。合計六万八千円の、経費が、毎月かかるわけだ。

この外、生活費を加えると、毎月十万円は、なんとしても、稼いでいかねばならなかった。二十四歳の若い弁護士に、事件を依頼する者はいなかった。

したがって、弁護士は、誰でも、十年くらい、ベテラン弁護士のイソ弁（居候護士）をやり、お得意が、若干固定してから、独立事務所を持つのである。

鳴海は、この方法を取らず、初手から、堂々たる事務所を持った。成算があつたわけではない。八人となかなるVという、希望と樂觀が、そうさせたのである。

鳴海は、足で事件を、掻き集めようと思い、毎日、午前中は、あらゆる知人を順番に訪問して歩いた。

手形を詐取されたという告訴事件や、交通事故による、損害賠償事件。或いは、小さな会社の、設立登記事件が、半年の間に、数件あつただけだった。

鳴海はあせつた。

が、儲かる事件は、老大家の弁護士に集中し、鳴海事務所は、ようやくピンチに、追い込まれた。家賃を二カ月も滞納し、毎日の食事にも、こと欠く状態がつづいた。

そんな折、鳴海は、亡父の知人の紹介で、離婚訴訟事件を引受けた。斎藤和子という四十一歳の人妻が、事件の依頼者だった。

和子の夫、斎藤信義は、八千代製袋株式会社の社長で、ビニール袋の製造業者だった。年間、三億円前後の生産高だったが、利幅が大きかったため、かなりの資産を貯めていた。

所謂、立志伝的人物だが、金ができると、女道楽をはじめた。芸者、ホステスを相手にしている頃は、無難だったが、会社のBGを相手にするようになって、夫婦の間柄は、デッドロックに乗りあげた。

斎藤はBGと、アパートに同棲し、殆ど帰宅しなくなったからである。

鳴海は、斎藤和子のため奮闘した。

家庭裁判所へ、離婚調停を申立て、二千万円の慰料と、三人の子供が成人するまで、毎月十万円ずつ支払わせることで、調停を成立させた。

鳴海は、この事件で、五百万円の謝礼を貰ったばかりでなく、間もなく、親子ほど年のちがう和子と通じ、毎月、数万円の援助をうけるようになった。

鳴海が、三十二歳の現在まで、独身でいたのは、かげに斎藤和子という、金づるの女がいたからである。

玉井京子は、柳橋の芸者だった。

京子の姉、百合と松枝も、同じ土地の芸者で、三人の美貌の姉妹は、或る時期、遊客の評判の的だった。

京子は、十九歳のとき、炭鉱経営者だった、石田富三郎の二号となり、浜町河岸に、料亭「浜京」を出してもらった。

旦那との間に、一女をもうけ、芸者時代に売れた女将の美貌をしたって、料亭は、かなり繁昌した。が、三年前、石炭業界不振のあおりを喰って、旦那の石田が倒産した。

債権者の眼をのがれ、石田が、「浜京」の奥まった

一室に潜んでいたとき、客をよそおい、飲食をしていた高利貸、司波仙造が、石田の部屋へ、踏みこんできた。司波は、石田の、三千七百万円の債権を持っていたからである。

個人保証をしていた石田は、「浜京」を担保に提供すると、言質を与えていたので、涙をのんで、「浜京」の土地建物を、代物弁済として、司波に支払った。石田は、手をついて、京子に謝ったが、二人の関係は、この時に断たれた。司波は、京子の美貌に眼をつけ、西銀座のバーを、五百万円で買い与え、第二のバトロンとなったのである。

鳴海五郎は、斎藤和子の事件以来、事務所を持ち直す、毎夜、銀座のバーを呑み歩いた。金銭上の不安は解消したが、年上の老女との情事に、砂を噛むような思いが、あったからだろう。

鳴海は、バー「京子」の開店以来、この店の常連となっていた。京子と、情を通ずるようになったのは、一年前の十二月からである。

が、二人の情事は、大きな困難が伴っていた。バト

ロンの司波仙造は、すでに六十九歳の老人だが、女色にかけては豪の者で、京子の外に、二人の女を、囲っていた。つまり、京子は四号というわけだが、新しい女ほど可愛いとみえ、異常な嫉妬の眼を光らせていた。

銀座のバーの終業時間前になると、司波商事株式会社の社長室勤務の野口富士夫か、岡林吾市が、用事もないのに、「京子」へやってきて、ハイボールを呑みながら、マダムの行状を、監視していた。

朝といっても、正午近くなると、「ご挨拶」と称して、二人の中のいずれかが、港区白金猿町の、京子の住む、コーポラスへ、顔を出すのである。

これでは、京子の生活は、がんじがらめに縛られているのと同じで、浮気など、到底、できるものではない。

鳴海が、当初、京子に興味を持ったのは、もちろん、その美貌だったが、司波仙造のきちがいじみた嫉妬の、裏をかく、スリルがあったからである。

もっとも、鳴海が、京子と、ここまで深入りしてし

まったのは、そればかりでなく、大きな金を掴む機会が、偶然にも、おとずれたからでもある。

この話は、後で、詳しく書くが、要するに、極東通運株式会社の、浮貸し事件にからみ、司波仙造を、敵としなければならぬ立場に、追いこまれていたのである。

鳴海が京子との密会を遂行する方法として、知恵をしぼったのが、大井荘の、屋下りの情事となったわけだ。

3

このアパートは、鳴海が、金を出して借りた。「おめかけアパート」は、どの部屋も、表札が出ていないことが、第一に、気に入った。第二は、国電の高架線から、十メートルくらいの距離しかないで、電車の走る音で、私語を盗み聞きされる心配がなかった。第三には、大通りから、かなり入りこんだ地点だったの

で、忍び通うには、人目につかない利点があったからである。

家賃は二万円だったが、現在の鳴海の財力からみれば、苦もない金額だった。玄関のドアを開ければ、ビロードのカーテンが垂れこめ、内部を見透かされることはない。

バスとトイレ。三坪のキッチンルーム。襖の奥が、八畳の和室で、ヒジカケ窓の外は、コンクリートの倉庫に面し、外から覗かれる心配もなかった。

床の間はあっても、掛軸がなく、炬燵のの掛布団の花模様の赤い色が、不安な情事を象徴しているようだった。

家財道具は、何もなく、壁際に、セミダブルのマットレスが、たたんであるだけだ。

鳴海は、京子を抱いたまま、めまぐるしく、思考をまとめていた。京子に、或る決意を抱かせる方法を考えていたのである。

京子は、鳴海の胸に、顔を埋めていたが、間もなく、嗚咽をはじめた。肩をふるわせ、鼻をすすめるのを

聞いて、鳴海は京子を納得させる方途を考えついた。

「ぼくだって、いつまでも、あんたと、こうしていたいよ。だが……」

「先生、私もよ。私、二十八にもなって、小学校二年生の女の子まで、ありながら、死ぬほど、先生を愛しているのよ。だから」

「ぼくは、ほんとのことをいうと、あんたと、結婚したいんだ。司波仙造の眼を掠めて、真っ昼間、こんな場所で、こんな会い方を、つづけていることが、苦しくなってきたんだ」

「私も、生れてはじめて、男の人の愛情を知ったわ。お金で、何人かの男に、からだを売ってきたけれど、一度だって、恋というものを、知らなかったの……」

「考えると、気が狂いそうになる。いっそのこと……いや、そんな無謀なことは夢物語かもしれない」

「聞かせてちょうだい。夢でもなんでも、先生と一緒にになれる可能性があるなら」

「ちょっと、司波仙造が、死んじまうことを、考えただけだよ」

「司波が……死ぬ……」

「人間は、時々、あり得べからざることを、夢想するもんだ」

京子は鳴海の膝からはなれると、居ずまいを正した。膝の上で、拳を固め、唇を噛みながら、鳴海の顔を、見据えた。

△京子に、司波仙造を、殺させる。そして、殺人犯人、玉井京子の無罪を勝ち取れるならば、それが一番いい方法だ▽

鳴海は、まじろぎもせず、京子の視線を、受け止めた。京子の一重瞼の眼に、ぎらぎらするような光りが、みなぎってきた。

△だが、京子の殺人の教唆の責任を、負わされたんじやつまらない。自分が、助かるには、京子を、捜査の圏外に、置かねばならない▽

鳴海は、そんなことを考え、京子の膝を、掴んだ。

「私が、司波を殺せばいいのね」

「そんな、ばかな……」

「そうしたら、先生は、私と、一緒になって下さる

の？」

「……」

「殺すわ。こうしていったって、いつかは必ず、司波に嗅ぎつかれるわ。そしたら、私は、バーからおっぼり出されるばかりじゃなく、殺されちゃうわ」

「司波のことだから、そのくらいのは、やりかねないだろ」

「先生、殺すわ。こっちが、先手を打つのよ。だから、殺し方を、教えて」

「そんなこといったって、困るじゃないか」

「一言いってちょうだい。殺せって」

「そりゃあ、司波が死んでくれれば、よろこぶ人間が、多いにきまっているよ。ぼくだって、その一人さ」

「じゃあ、どうやって……」

「青酸カリ、ガス、アトロピン、短刀、拳銃——推理小説に、色々な手段が、書いてあるが、問題は、あんたが、捕らない方法を、どうするかにある。万一、逮捕されれば、もちろん、ぼくが、弁護を引受ける。し